

■渡辺哲郎さん、林香枝子さんありがとう！

渡辺さんとシスター林がCTICを9月一杯で退職することになりました。二人は、CTIC 亀戸の設立から現在に至るまでの14年間、数千人に上る人たち（外国人・日本人）を誠実に力強く支えてきました。色々な問題を抱えて悩み苦しんでいた外国籍の人たちにとって、彼らの存在はとても大きなものでした。



彼らは、CTIC 亀戸に来られた方々の苦しみや悲しみ、喜び、傷ついた魂の傍らに、いつも立っていたように思います。あるペルー人は手紙で次のように書いています。「神様が辛く苦しい私の道の途中にあなた方を置いてくださったことを心から感謝いたします」。亀戸の小さな狭い事務所から始めた歩みは、今年の12月末日で幕を下ろし、統合と再編に向けた新しい歩みが始まります。この亀戸の14年の歩みは、人と本気になって関わるといふCTICのこころをつくる歩みでした。渡辺さんとシスター林に事務局長として感謝をこめてありがとうと申し上げます。

(事務局長 大原 猛)

■日本カトリック難民移住移動者委員会 J-CaRM 全国研修会 in 名古屋のお知らせ

日時 2008年10月13日(月)～15日(水)
場所 南山学園研修センター(名古屋市昭和区広路町単人30)
内容 共存から共生へ～ブラジル人学校の実情から～
定員 100名(申込締切:9月30日)
参加費 3,000円(全日程分、宿泊費・食費・交流会費別途)

*問合せ、参加申込は、難民移住移動者委員会事務局まで
Tel 03-5632-4441 Fax 5632-7920 <http://www.jcarm.com>



Catholic Tokyo International Center カトリック東京国際センター (CTIC)

【運営委員長】岡田武夫 【事務局長】大原 猛

目黒事務所(外国人司牧センター、事務局)

〒141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-22

Tel (03)5759-1061

Fax 5759-1063

亀戸事務所(外国人相談センター)

〒136-0071 東京都江東区亀戸 1-21-5 YSビル 5F

Tel (03)3636-1981

Fax 3636-1985

千葉事務所(外国人相談司牧センター)

〒260-0032 千葉市中央区登戸 1-11-18 第2潮ビル 302号室

Tel (043)238-0187

Fax 238-0188

*賛助会へご協力下さい。(A) 会員 10,000円(年間) (B) 会員 5,000円(年間)

《郵便振替》00150-5-120640 カトリック東京国際センター賛助会

《銀行振込》みずほ銀行目黒支店(普通)8010313

宗教学法人カトリック東京大司教区カトリック東京国際センター代表役員岡田武夫

CTICニュース

Catholic Tokyo International Center

No.63

October 2008

カトリック東京国際センター (CTIC) 事務局 〒141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-22 目黒教会内 Tel 03-5759-1061



多文化の背景を持つ青少年と家族のためのサマーキャンプ
7月31日千葉県

今年十一月二十四日にペトロ岐部と一八七殉教者の列福式が長崎で行われます。今回列福される殉教者の中には江戸の殉教者、ヨハネ原主水(もんど)とペトロ岐部カスイもいます。一八八人は全員日本人ですが、その近くに光を放つ一人の韓国人女性があります。彼女の名は「おたあジュリア」です。

ジュリアは豊臣秀吉の朝鮮半島侵略の際、日本に連行されてきた少女でした。キリシタン大名小西行長のもとで育てられ、熱心なキリスト信者になりました。関が原の戦いで行長がついていた西軍が敗れた後、その美貌と才能が徳川家康の目にとまり、大奥に召し抱えられたと言われています。

しかし一六一二年、家康は自分の側近のキリシタン全員に棄教を命じました。ジュリアはこれを拒否して伊豆諸島に島流しになりました。この時、原主水はその命令を知って姿を隠します。彼はその十一年後に殉教しました。ジュリアのその後はいくわしく分かっていませんが、彼女の信仰と愛を貫く生き方は周囲の人々に感化を与えたと伝えられています。

今も日本に生きる多くの外国人信徒がいます。さまざまな困難の中で信仰を支えに生きている人々の姿は、四〇〇年前のジュリアのように、わたしたち日本人にとつての大きなメッセージなのではないでしょうか。

東京教区では今回の列福に関する英語・ポルトガル語・スペイン語の簡単なパンフレットを用意しました。どうぞお役立てください。

CTIC運営委員 幸田和生
(カトリック東京大司教区補佐司教)

CTIC 設立 20 周年へ向かって

- 事務所統合と再編成 -

運営委員長 岡田武夫（東京大司教）

カトリック東京国際センター CTIC は 2 年後の 2010 年、設立 20 周年目を迎えます。

「外国人の司牧と困難を抱えた外国人へのサポート」は東京教区の優先課題の一つです。1990 年、東京教区は教区設立 100 周年記念事業として、外国人を支え励ますための機関として、「東京教区国際司牧センター」（現在のカトリック東京国際センター CTIC）を設立しました。

18 年が経過し、教会でも社会でも、国際化・多国籍が進み、定住する外国人が増えてきました。日本のカトリック教会のメンバーの半数は外国籍の人です。

他方、日本の社会では高齢化が進む一方、人口は減少する傾向にあります。外国からの移住者を積極的に受け入れて日本社会の活性化を図るべきだ、という声も聞かれます。日本人もこれから真剣に「多民族共生社会」の実現に向けて意識の変革を図らなければならないでしょう。

教会は聖霊降臨のときから多民族で構成される神の民です。東京教区の優先課題「外国人の司牧と困難を抱えた外国人へのサポート」は教区を挙げて実行すべき、教会全員の行うべき課題です。CTIC は聖堂共同体（小教区）

とのつながりをより強化しながら、聖堂共同体（小教区）の司牧活動を支援します。そして聖堂共同体（小教区）で直接対応するには難しい課題については鋭意、種々の要請に堅実に応答できるように、体制を整えてまいります。

外国人のための相談・支援活動は教会の大切な司牧活動であります。20 周年を前にこの点に深く留意しながら、三つの事務所の運営体制について運営委員会やスタッフの全体会議で話し合いました。その結果、三つの事務所を再編成し、統合された CTIC 事務所を目黒教会内に設置することにしました。すなわち、亀戸、目黒、千葉の事務所は新たに「カトリック東京国際センター事務所」として目黒教会内に設置され再発足します。統合と再編成により、職員間のコミュニケーションもより容易になり、また事務所運営の経費も節減することができます。

何卒ご理解を賜りますようお願い致します。



10年ひと昔 CTICは常に新し

亀戸事務所 渡辺哲郎

8月の来訪者

ひと月前の8月、夏真っ盛りは、子どもたちにとっては夏休みでもあります。

いつもの相談者に加えて、10年来の「お付き合い」となっている親子連れが、「表敬訪問＝子供の成長を見せ」に次々と亀戸事務所にやってきます。

汗を拭き拭きやってきたOさん（中国）と、生まれつきの大きな障害を克服しつつある中学1年生のY君。障害の治療が進み、体も大きくなり、学業も優秀で、将来が楽しみです。ようやく少しは安心できるようになった息子を見つめる母親Oさんの愛情あふれる横顔が印象的でした。

Rさん（フィリピン）と、5年生の末娘M子さん。父母の「離婚騒動」にもめげず、健気にも母親を助けて、19歳の兄と6年生の姉の「面倒見」をしてきた利発で元気娘のM子さんです。兄と姉には二人とも障害があります。

「認知裁判」を経てビザを得たIさん（フィリピン）と、5年生のA子さん。A子さんの成績表は、5段階評価の「オール3」状態です。母親のIさんは「成績の心配限りなし」の様子です。しかし、A子さんは4月1日生まれで、クラスでいちばんのおチビさんですが、ガンバリ屋さんで欠席もなく、すくすくと育っています。

事務所の夏休み明け初日、V子さん（フィリピン）と、妻となり母となった娘のE子さん（19歳）と1歳のR君。今度はV子さんではなく「娘E子さん夫婦の喧嘩、離婚、子の取り合い」の問題です。近頃は親子二代に亘る相談・支援も増えてきました。

CTIC「第二期」へ

1980年代の「バブル」景気の時代に「エンター

テナー」として、フィリピンや東南アジア諸国から大勢の女性が来日しました。さらに、1990年に、日系人に「単純労働にも従事できる定住者ビザ」が交付されました。また、1994年には「不法滞在者」は30万人を数えました。

こうした大勢の外国人「出稼ぎ労働者」が来日する時代状況の中で、1994年9月1日にCTIC亀戸相談センターがスタートしました。2006年頃までは「ビザなし」の相談者が多く、「緊急避難的な要素」の多い相談とそれへの「応急的な対応」が続きました。そして今、「ビザあり」の相談者が増えて、相談の内容も、また支援の有り様も変化してきました。

「不法滞在者」が半減し、エンターテナーの来日が減少しています。他方、研修・技能実習制度の見直しや、看護師・介護士の迎え入れなど「外国人労働力確保」の動きがあります。外国人登録者数は増加しています。また、永住者の増加が目立ちます。

こうした「時代の変化」の中で、CTIC相談・支援活動は「第二期」とでもいえる時期を迎えています。これからは、「定着し、自立した永続的な社会生活ができるように努力を続ける人たち」への「相談と継続的な支援の取り組み」がますます必要になってくることでしょう。



相談中断
おしめ換え

地区からアクセスしやすい亀戸に事務所を置きました。亀戸には「ひまわり診療所」を初めとする外国人を支援する NGO ネットワークが存在していたこともこの場所を選んだ理由の一つでした。

亀戸事務所開設当初



■ 1996年～1997年司祭研修会と司教教書「人間への共感をバネとして」を公表

「滞日外国人に対する司牧責任を果たすために」をテーマに司祭研修会が開かれました。この研修会で司祭たちは外国籍信徒司牧に関する様々な諸課題を真剣に討議し、教区に提言を行いました。司祭研修会の提言を受けて白柳大司教は司教教書「人間への共感をバネとして」—外国人司牧に関する司牧教書—を発表されました。この教書の終わりで白柳大司教は「外国人の信徒のさまざまなニード（たとえば典礼や幼児洗礼等）に応じていくことも求められております。」と司牧に関する仕事の重要性を強調されました。



CTIC十周年記念ミサ

■ 2000年4月 目黒司牧センターの開所

これを受けて2000年4月、目黒に司牧センターが誕生しました。センターにニコラス神父、フィリピン人信徒宣教者をスタッフに迎え、外国籍信徒司牧に関する諸問題に一つ一つ取り組むようになりました。

■ 2002年4月 CTIC千葉事務所の開設

千葉地区はCTICの開設に先駆けて、1990年1月から外国籍信徒司牧のためにフィリピン人信徒宣教者が働き始めました。千葉県では外国籍信徒と日本人信徒との比率は約7対4の割合で外国籍信徒が多いため、司祭が定住する11教会すべてで外国語ミサが行われています。そういった背景から千葉県にCTICをつくって欲しいとの要望が司祭・信徒から寄せられ2002年4月に開設することになったのです。



CTICちば開所式

■さらなる発展を目指して 2008年～

様々な歴史的背景や外国籍の方々のニーズに応えるために、CTICは働いてきましたが、CTICが開設されてからの18年の間に、状況は大きく変化してきました。新来外国人の定住化が進み、今や三世代の子供たちが誕生しています。状況の変化はCTICのこれからの在り方に大きな変化をもたらすのではないかと思います。より広く、多岐に渡った対応ができるためには、真の意味でのリストラ（restructuring）再構築が求められています。CTICが一つになることによって更なる貢献ができることを願ってやみません。

「みんな違って、みんないい — Everyone is unique !」

CTICサマーキャンプの願い

千葉事務所 中村 潔

今年も「多文化の背景を持つ青少年と家族のためのサマーキャンプ」が7月29日～31日の2泊3日、千葉市少年自然の家で実施されました。キャンプのテーマは「みんな違って、みんないい — Everyone is unique !」。参加者はほとんどが外国人の親を持つ子どもたちとそのファミリーです。キャンプ中はその個性を生かし、生き生きとした姿を見せる子ども達ですが、日本での日常生活に戸惑いや困惑を覚えるものも少なくないようです。

キャンプ参加者に限らずダブルの子どもの中には、日本で生活する上で様々な困難さを伴うことがあります。例えば、言葉がわからず友達とのコミュニケーションがうまくいかなかったり、学校の授業がわからないのでついていけず不登校になったり、文化の違いから考え方や感じ方などが理解されないため友達となじめずいじめられたり、学校からもらってくるお知らせやプリントを親が理解できないので、学校で必要なことを準備できず翌日先生に叱責されたりと様々です・・・。

また、日本で生まれ育っている両親が外国人の子ども達の中には、このようなこともあります。日本で生まれ育っているのに、考え方や感じ方が日本人とまったく変わらないのですが、氏名が外国語であり、見た目も違うところがあるので時々、友人から外国人と言われ区別され、場合によってはいじめられることもあります。また、その子が両親の母国へ戻ることがあります。見た目はもちろん両親の血を受けているので母国人とまったく変わらないのですが、言葉ができなかったり、考え方や感じ方が違ったりするので友人から区別され、母国人ではないと言われてしまうことがあるそうです。そん

な両国のコミュニティーの中から区別され排除されて育った子どもは、国籍があっても実際には「自分はいったい何人(なにじん)なのか。」と、どこにも属していないような疎外感や孤独感を持つようになってしまいます。しかし、その子どもは、両親が持つ母国文化の価値観の中で家庭生活を送り、日本の文化・価値観の中で学校生活を送っているのだから、2つの文化、考え方や感じ方、価値観を理解できる存在であるはずですよ。

今、世界はグローバリゼーションの中で人々の移動が激しくなっています。日本も例外ではなく、国内に住む外国人は増え続けており、それに比例して国際結婚も増え、ダブルの子どもたちもますます増えてきています。特に教会は信徒の半数を外国人が占める時代を迎えています。多文化共生が求められる教会、社会において、彼らは大きな役割を果たせる希望の存在ではないでしょうか。どこにも属していないという疎外感や孤独感ではなく、両方の文化を理解し、そのよさを活かせる豊かな可能性を持った存在であるという自尊心を持って、力強く生きてほしい。そんな願いを持って、CTICのサマーキャンプは企画・実施されています。今後もCTICでは、彼らの豊かな成長を支える機会となるようなプログラムを展開していきたいと考えています。



派遣ミサ・茂原教会にて

「Clinical Interventions for Migrants in the Pastoral Setting」 に参加して

亀戸事務所 奥山マリア・ルイサ

6月2日から6月12日まで、マニラ アテネオ大学で開催された「Clinical Interventions for Migrants in the Pastoral Setting」に参加する機会に恵まれました。このセミナーは、日本在住のフィリピン人移住労働者のカウンセリングに当たる人だけにターゲットを絞り、そのスキルアップを目指して企画されたものです。そのため、『在日のフィリピン人移住労働者』の抱える問題点について、きめ細かい分析がなされていました。CTICでの相談活動に『通訳』として約10年関わっているものの、専門知識を持っていなかった私にとって、体験的な自分の知識を学術的に整理統合し、理解する大きな助けになりました。

CTICに相談に来るフィリピン人女性達の中には、『エンターテイナー』として幼さの残る年齢で来日し、フィリピンで社会人として十分に成熟しないまま、つまり自己を確立しないままに、日本社会の特殊な部分で社会体験を積み、そのまま結婚してしまう人が少なくありません。そのような場合、多くは「自分」を十分に理解できていませんし、いざ問題が起こった時、自分の抱えている問題を整理分析し、カウンセラーに自分の言葉で伝えることが困難なのです。そんな彼女達の『通訳』として、弁護士事務所においても、裁判所においても、福祉事務所においても、言葉を訳すだけでは不十分で、その状況を理解し、心の内にあるものを引き出し、問題を整理し、それを言葉にして表現してゆくこと、『コミュニケーションの橋渡し』が私の役割だということを、セミナーの中で再確認しました。そして、そのためには私が自分自身を正しく理解すること、つまりフィリピン人としてのアイデンティティーと日本で日本人の

妻として、二人の子の母として得たもの、習得したものがどのようなものであるかを、意識して見つめておく必要があると感じました。同じフィリピン人であっても、彼女達の問題を「訳す」私というフィルターは、彼女たちと同一ではないからです。これが、今回のセミナーを通して、私自身内面的に課すようになった一つの宿題です。

一方、相談に来る人達に、『橋渡し』として求めていかなければならないことも見えてきました。それは、日本で長期に渡って生活する人達に、日本人のやり方を十分理解し、習得するよう促すことです。彼らが日本社会によりよく定住するために、さらに日本で子育てをするために不可欠だと感じました。しかし、それも『堅固な自分』の上に積み上げられるものなので、フィリピンでの社会体験が十分でない人達には、それを補う機会を準備することもCTICの役割なのでしょう。

毎日の相談業務に追われている私にとって、今回のセミナーは、長期的なビジョンを得る機会となりました。実現に向けて、日々努力して行きたいと思っています。



修了証書を手

CTIC 18年の歩み

～再構築に向けて～

事務局長 大原 猛

■ 1990年7月 国際センターの設立

東京教区にカトリック東京国際センターが誕生したのは、1990年のことでした。当時の教区長白柳誠一大司教は東京教区民に宛てた書簡で次のように述べています。「教区創立100周年記念企画委員会は、記念事業として、社会に積極的に役に立つ事柄を選択することにいたしました。具体的なプランとして、在日・滞日外国人を支え、励まし、力づけることができるような施設・機関の設置であります。」(1990年9月22日)この要請に従い国際センターは大司教館に開設されることになりました。

開設時
作成の
小冊子



■ 1986年以降の円高と外国人の増加

センター設立の背景には、1986年に始まった円高による外国人の急増がありました。1985年に1ドル250円だった円は1986年に120円までに上昇し、その後も円高が続き、バブル期には1ドル100円前後で推移するようになりました。

85年の20万円をドルに換算すると約796ドルですが、86年に1ドル120円になると、同じ20万円が1666ドルに、100円になれば、2000ドルになるわけです。これ

は外国からの出稼ぎ労働者にとって大きな魅力でした。

バブル期には、特に生産現場や建設現場での労働力が不足していたため、外国人労働者が職を求めて来日し、1990年には入管法の改正によって、ブラジルやペルーなどの日系人に定住ビザが発給されると、更に中南米諸国からの移住者が急増したのです。

■ 教会の戸惑いと混乱

新来外国人の多くがフィリピンや中南米などカトリック国からだったので、日本の教会は今まで経験したことのない問題に直面するようになりました。

前触れもなく頻繁に依頼される幼児洗礼、子供たちを信徒籍に入れるか否かの問題、外国籍信徒のためのミサ、日本人信徒と外国籍信徒の文化・習慣の違いから生じる軋轢、結婚、離婚などの司牧上の諸問題、その上、賃金未払い、労働災害、解雇などの労働問題、複雑なビザの問題、保険のない人の疾病の問題、出産など様々なケースが小教区に寄せられていました。

■ 1994年9月 CTIC 亀戸事務所の開設

国際センターが設立されたとはいえ、様々な問題に応えるに十分な態勢ができておらず、司牧に関するポリシーも不明確であったため、司牧指針は時間をかけて協議することとし、当面差し迫った相談・支援に応えることを優先課題としました。そのため、外国人が多く居住する東京東部地区や千葉